

Kitami Institute of Technology

北見工業大学

学報

平成16年 3月 事務局総務課発行 第202号

平成15年度学位記授与式



(関連記事 3ページに掲載)

目 次

平成15年度学位記授与式挙行	3
告 辞	4
入試関係	
大学院工学研究科（第2次）入学試験の実施	6
入学試験の実施	6
研究助成	
平成15年度民間等との共同研究の受入状況	7
平成15年度受託研究の受入状況	7
平成15年度奨学寄附金の受入状況	8
人 事	
人事異動、新任者紹介、住所変更等	10
海外渡航	10
寄 稿	
樹氷のポリマーニア（化学システム工学科 小林正義）	11
諸 報	
21世紀のエネルギーと環境に関する特別講演会を開催	14
学長主催特別講演会を開催	14
第2回外国人留学生見学旅行	15
外国人留学生スキー研修	15
2004年留学生交流の夕べを開催	16
平成15年度奨学・奨励金及びミント賞授賞式	17
北見工業大学永年勤務者表彰式（退職時表彰）	18
日 誌	
1月・2月・3月	19

* 住所変更等については、3月15日まで掲載しました。

平成15年度学位記授与式挙行

(総務課)

平成15年度学位記授与式が、3月25日(木)午前10時から本学講堂で行われました。

学部378人の卒業生、大学院博士前期課程102人及び大学院博士後期課程7人の修了生に対し、常本学長から学位記が授与されました。

引き続き、学長告辞、北見市長(代理：収入役)及び学生後援会会長からの祝辞の後、電気電子工学科 上山太郎さんが答辞を読み上げ、式は無事終了しました。

卒業生、修了者数等は、次のとおりです。

学部

学 科 名	卒業生数(人)
機械システム工学科	82
電気電子工学科	68
情報システム工学科	55
化学システム工学科	49
機能材料工学科	50
土木開発工学科	74
合 計	378

大学院博士前期課程

専 攻 名	修了者数(人)
機械システム工学専攻	20
電気電子工学専攻	15
情報システム工学専攻	7
化学システム工学専攻	19
機能材料工学専攻	15
土木開発工学専攻	26
合 計	102

大学院博士後期課程

専 攻 名	修了者数(人)
システム工学専攻	4
物質工学専攻	3
合 計	7



告 辞

学長 常 本 秀 幸

本日は、学部卒業ならびに大学院修了まことにおめでとうございます。

皆さんの本学に在籍した年月は様々でしょうが、多くの思い出をつくって就職あるいは進学していくことを心より祝福します。また、ご多忙中にもかかわらずご臨席賜りました神田北見市長、新井山学生後援会会長に心よりお礼申し上げます。

本年度は学部卒業者378人、大学院前期課程修了者102人、大学院博士後期課程修了者7人、このうち留学生12人を含む合計487人を送り出しますが、年々大学院修了生が増加し本学の講堂も手狭になりました。父母の方々にはスクリーンを通してのご挨拶になり、ご子息・ご令嬢の晴れ姿を直接お見せすることができませんが、大学の事情にもご理解いただければ幸いです。

学部学生が入学したのは西暦2000年、シドニーオリンピックの年、あれから4年が過ぎ今年はアテネオリンピックの年になりました。スポーツに関連した話題の多い環境の中で4年間を過ごしてきたと思いますが、特に2002年のサッカーワールドカップは日本中が青色に染まり、興奮と感動の一時を過ごすことができました。このようにスポーツを通して感動を得ることが多いと思います。たとえばラグビー選手のように、姿だけで威圧感を与える巨漢の選手が、勝って喜びの涙を流し、負けては悔し涙を流す、それを見ている我々も胸を熱くします。それは血がにじむような努力が結果となった瞬間の涙で、この涙は、努力と感動の証しだと思います。

感動は自分の努力が報われたときほど大きいと思いますが、スポーツばかりでなく、映画を見たり、本を読んだり、音楽を聴いたり、旅をしたり、いろいろな体験の中で感動を味わうことができます。このように感動を通して感情豊かな人格が形成されていくと思います。是非、感動の機会をたくさんつくって下さい。

しかし、最近人間性が問われる事件が急増し

ております。9・11テロあるいはスペインでの列車爆破のような無差別テロは言うに及ばず、身近な所では凄惨な児童虐待が後を絶ちません。この児童虐待等の事件は、こころの成長していない大人が増えている証しでもあります。原因は様々で、家庭環境、教育環境、社会環境など多くの問題が考えられます。皆さんが子供の頃は日本の経済成長がピークの頃でしたので、父親は企業戦士として家庭を顧みることができませんでした。子供と向き合う時間がなかった親は、簡単に物を買って与えることで、子供の要求に応えてきました。それに目をつけたのがゲーム機器産業で、これによって子供の日常生活が大きく変わっていきました。大声で笑ったり、時には取っ組み合いをする大切な友達に代わって、話しをしなくてすむ機械が最高の友達となり、これで人間形成を遅らせてしまった例も多いように思っています。今、家庭・社会各々ができることからこの問題に取り組む必要があります。もちろん大学の役割も重要です。本学は対話形式の授業や、学生実験、実習などのチーム作業あるいは卒業研究など、教師や仲間との触れ合いから、人間関係を学ぶことができるような教育を目指してきました。

北見工業大学で教育を受けたことに誇りと自信を持ち、社会で活躍されることを願っています。

本学は1960年に短期大学として創設され1966年に4年制となり、国立大学として発展してきました。しかし、この4月から法人格を持つ大学として新たに出発しますので、国立大学最後の卒業生です。法人になっても外見は変わりませんが、大学間の競争が激しくなり、教育の質の向上と研究の活性化に向けた努力が始まります。明治以来の大学改革と言われておりますが、成熟した時代の改革は簡単ではありません。皆さんを含め、1万人を超える卒業生に協力をいただきながら、「未来に輝く大学」創りを進めて行きます。同窓会会員には、毎年オホーツク

スカイという広報誌をお送りし大学の近況をお知らせしますので、北見を離れる前にぜひ入会し、本学の後方支援の一員として協力していただきたいと思います。

最近の報道は明るい話題が少ないのですが、技術者にとって朗報と言え、特許権の話があります。日亜化学工業時代の中村さんが発明した青色発光ダイオードは、会社の収益の柱になっており、その貢献度を考慮した特許権に200億円の判断が出されています。この金額は別格としても、松井選手やイチロー選手並みの年収を得るスーパー技術者が出なければ技術創造立国日本を支える理科好き若者が増えません。特許は努力の積重ねの中から生まれる場合と偶然の発見がありますが、それを製品化して流通させるまでには多くの仲間の努力もありますので、アメリカ型の特許権算定に問題がないわけではありません。しかし、発明者の貢献度が高く評価されるようになった点で、中村さんの裁判は大きな一歩になったことは確かです。皆さんも是非すばらしい発明で、スーパー技術者として活躍して下さることを期待します。

もう一つの明るい話題は火星探査機です。日本、ヨーロッパ、アメリカが昨年暮から新年にかけて探査機を着陸させる試みをしました。成功したのはアメリカの2台のみでした。宇宙開発技術力に大きな差を感じますが、遙かかなたのロボット操作が自由に行え、しかも故障したコンピューターの補修までやってのけるアメリカの技術力は賞賛に値します。日本ではH2Aロケットが失敗していますが、夢のある科学技術の挑戦にも目を向けることが必要です。

私の専門は自動車用エンジンで自動車メーカーで10年間開発に携わりましたが、日本の自動車産業が急成長し、技術的にも高い評価を受けるようになった背景には膨大な費用のかかる自動車レースへの参戦があります。小型で高出力の信頼性の高いエンジン、高速走行に耐えられる足回りの技術、空気抵抗の少ない車両形状の開発、これらの基になる研究がレース用車両の開発過程で築かれ、世界一の自動車を造る技術になっています。このような次の時代を担う技

術開発への先行投資が強い産業をつくる基になります。

また日本は、これまで欧米で発明された原理を応用した製品開発、いわゆるキャッチアップ型で成功してきましたが、青色発光ダイオードのような独自の特許を基にした製品開発、すなわちフロントランナー型への転換が求められています。現在は、フロントランナーになるための過渡期でもありますが、ここに来て、液晶技術、デジカメ等の家電製品、ハイブリッド車、特殊な触媒など自動車産業にフロントランナーが現れ、これらが景気回復の原動力になりつつあります。したがって、これからの技術者に必要な「技術屋魂」と言えば、「創造力」だと考えます。この創造力の源は「夢を持つこと、好奇心を持って挑戦すること」です。さらに、時代の変化に対応する柔軟性が重要です。

そのような中で、本学の当面の目標は「変化」です。栄枯盛衰とありますが、繁栄が持続し続けた国家あるいは産業の例は歴史上ありません。今がピークであれば次は衰退する可能性があるということです。この数十年の歴史の過程でもそれが明らかです。戦後間もない頃は三白といって砂糖、パルプ、繊維業界がトップランナーでした。その後、重厚長大の時代すなわち造船、重工業、鉄鋼、自動車などが時代をリードしましたが、次に軽薄短小で家電産業、IT、サービス産業などが主流になりました。その変わり目にきているのが日本の現状だと思います。国家も企業も大学も、そして、個人も時代の変化に柔軟に対応することが求められています。

ダーウィンは進化論の中で次のように言っています。「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるのではなく、唯一生き残れるものは変化できるものである」。まさに、大学も時代の変化に対応し変革しなければなりません。このことは皆さんにとっても同様です。自分のために、そして21世紀の日本のために、そして地球のために自己改革に励んでください。

以上、卒業、修了にあたり、激励をこめて告辞といたします。

= 入試 =

(入学主幹)

大学院工学研究科 第2次 入学試験の実施

平成16年度大学院工学研究科博士前期課程(第2次)入学試験が、2月9日(月)(学力検査)と10月(火)(面接試験)に実施されました。

また、平成16年度大学院工学研究科博士後期課程(第2次)入学試験が、2月9日(月)(面接試験)に実施されました。

各専攻別、各課程別の合格者数等は以下のとおりです。

博士前期課程

専攻名	募集区分		学部3年次		外国人留学生特別選抜	
	一般選抜 志願者	一般選抜 合格者	志願者	合格者	志願者	合格者
機械システム工学専攻	10	8	0	0	1	1
電気電子工学専攻	9	6	1	1	0	0
情報システム工学専攻	3	3	1	0	0	0
化学システム工学専攻	6	3	0	0	0	0
機能材料工学専攻	5	4	0	0	2	2
土木開発工学専攻	4	3	0	0	1	0
合計	37	27	2	1	4	3

博士後期課程

専攻名	志願者	合格者
システム工学専攻	10	10
物質工学専攻	5	5
合計	15	15

入学試験の実施

本学の平成16年度学生募集に対して、前期日程689人、後期日程1,277人の出願がありました。

前期日程は大学入試センター試験のみの選抜で3月6日(土)に合格者を発表し、後期日程は3月12日(金)に個別学力検査を実施し、3月20日(土)に合格者を発表しました。

今年度の入試実施結果は、次のとおりです。

前期日程

学 科 名	募集人員	志願者数	合格者数
機械システム工学科	40	86	52
電気電子工学科	42	107	60
情報システム工学科	25	64	37
化学システム工学科	30	62	50
機能材料工学科	22	214	57
土木開発工学科	32	156	55
計	191	689	311

後期日程

学 科 名	募集人員	志願者数	合格者数
機械システム工学科	28	212	48
電気電子工学科	30	251	35
情報システム工学科	25	133	25
化学システム工学科	18	96	23
機能材料工学科	22	313	37
土木開発工学科	36	272	54
計	159	1,277	222

推薦入学

学 科 名	募集人員	志願者数	合格者数
機械システム工学科	12	22	14
電気電子工学科	8	15	12
情報システム工学科	10	21	12
化学システム工学科	12	16	15
機能材料工学科	6	6	6
土木開発工学科	12	17	14
計	60	97	73

= 研究助成 =

平成15年度民間等との共同研究の受入状況

(総務課)

所 属	職 名	研究代表者	研 究 題 目	民間機関等名
化学システム工学科	教 授	多田 旭男	大気中二酸化炭素還元固定化システム用メタン触媒分解プロセスの基盤技術開発	鹿島建設(株)
化学システム工学科	教 授	多田 旭男	大気中二酸化炭素還元固定化システム用メタン触媒分解プロセスの基盤技術開発	(株)日本製鋼所
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	土ブロックの凍結融解抵抗性に関する研究	水元建設(株)
土木開発工学科	教 授	鈴木 輝之	低温下における遮水シートの熱融着機能に関する研究	(株)ブリヂストン

平成15年度累計 80件

平成15年度受託研究の受入状況

(会計課)

所 属	職 名	研究担当者	研究題目及び研究期間	委託機関	所要経費 ^円
留学生教育相談室	教 授	山岸 喬	新規代謝改善型高機能複合食品素材の研究 平成16年2月～平成16年8月	独立行政 法人科学 技術振興 機 構	1,000,000

平成15年度累計 13件

平成15年度奨学寄附金の受入状況

(会 計 課)

所 属	職 名	研 究 者	寄 附 目 的	寄 附 者	寄附金額 ^円
電気電子工学科	助教授	菅原 宣義	「各種がいしの着氷雪条件下での絶縁特性に関する研究」に対する研究助成	日本碍子(株)	500,000
未利用エネルギー研究センター	助教授	八久保晶弘	「工学研究」に対する研究助成	八久保晶弘	360,000
化学システム工学科	助教授	高橋 行雄	「工学研究」に対する研究助成	米田 徳彦	500,000
機械システム工学科	助教授	閻 紀旺	「工学研究」に対する研究助成	(株)ミットヨ	1,000,000
機能材料工学科	助 手	村田 美樹	「工学研究」に対する研究助成	大正製薬(株)	500,000
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	「奨学研究」に対する研究助成	ドービー建設工業(株)	1,000,000
土木開発工学科	助教授	高橋 清	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	500,000
	学 長	常本 秀幸	「北見工業大学における学術振興・国際交流等事業」に対する助成	北見工業大学学術振興・国際交流等事業を支援する会	1,545,738
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	「エココンクリートに関する研究」に対する研究助成	日産化学工業(株)	1,000,000
土木開発工学科	助教授	高橋 清	「交通工学に関する研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	500,000
留学生教育相談室	教 授	山岸 喬	「工学研究」に対する研究助成	小太郎漢方製薬(株)	400,000
土木開発工学科	教 授	鈴木 輝之	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	500,000
土木開発工学科	教 授	鈴木 輝之	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	300,000
電気電子工学科	助教授 教 授	村田 年昭 田村 淳二	「埋め込み形同期発電機の運転効率算定のための研究」に対する研究助成	(株) K R I	1,000,000
未利用エネルギー研究センター	助教授	八久保晶弘	「工学研究」に対する研究助成	八久保晶弘	350,000
電気電子工学科	教 授	谷本 洋	「教育・研究」に対する研究助成	(株)半導体理工学研究センター	1,200,000
機械システム工学科	教 授	大橋 鉄也	「多結晶モデルによる高度構造解析手法」に対する研究助成	(株)日立製作所 日立研究所	1,500,000
土木開発工学科	教 授	大島 俊之	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	1,000,000
電気電子工学科	助教授	柏 達也	「車載アンテナのFDTD法の電磁界シミュレーション技術に関する研究」に対する研究助成	(株)本田技術研究所 栃木研究所	1,500,000

平成15年度累計 90件

=人事=

人 事 異 動

(総 務 課)

○大学発令

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
16. 3. 1		柴 野 純 一	助教授(機械システム工学科)に採用する
16. 3. 15		首 藤 登志夫	教授(機械システム工学科)に採用する
16. 3. 31	教授 (化学システム工学科)	小 林 正 義	平成16年3月31日限り定年退職
16. 3. 31	会計課車庫長	中 田 稔	平成16年3月31日限り定年退職
16. 3. 31	会計課守衛長	上 田 積	平成16年3月31日限り定年退職
16. 3. 31	学生課専門員	三木田 敏	辞職を承認する
16. 3. 31	総務課専門職員	長谷川 充 子	辞職を承認する
16. 3. 31	会計課管財係長	石 谷 洋 子	辞職を承認する

新 任 者 紹 介

機械システム工学科助教授に ^{しばの じゅんいち}柴野 純一 氏

昭33. 2. 3生
 昭58. 3 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 平 8. 12 博士(工学)(北海道大学)
 昭58. 4 三井造船株式会社玉野事業所機械工場
 61. 7 工学者エンジニアリング株式会社札幌本社技術部
 63. 7 北海道大学工学部助手
 平 9. 4 " 大学院工学研究科助手
 14. 1 " " 助教授
 16. 3 北見工業大学工学部助教授



機械システム工学科教授に ^{しゅどうと しお}首藤登志夫 氏

昭41. 8. 30生
 平 7. 3 北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了
 7. 3 博士(工学)(北海道大学)
 7. 4 三菱自動車工業株式会社乗用車開発本部
 9. 10 武蔵工業大学工学部エネルギー基礎工学科講師
 14. 4 " " " 助教授
 15. 4 " " 環境エネルギー工学科助教授
 16. 3 北見工業大学工学部教授



海 外 渡 航

○外国出張

所 属	職 名	氏 名	渡 航 目 的 及 び 渡 航 先 国	期 間
化学システム工学科	助 教 授	高 橋 行 雄	超酸を使用する新規有機合成反応の開発に関する研究打合せ (アメリカ合衆国)	16.1.6 ～16.1.10
土木開発工学科	教 授	海老江 邦 雄	浄水処理における濁質分離の高効率化に関する研究交流及び講演 (中華人民共和国)	16.1.11 ～16.1.15
化学システム工学科	教 授	堀 内 淳 一	平成15年度文部科学省海外研究開発動向調査 (デンマーク王国)	16.1.14 ～16.1.29
情報処理センター	助 教 授	青 山 茂 義	原子核のデータベース及び数値計算コードの研究調査 (ハンガリー共和国)	16.2.11 ～16.2.20
共 通 講 座	教 授	照 井 日 出 喜	現代ドイツの演劇状況に関する芸術社会学的研究(ドイツ連邦共和国、オーストリア共和国)	16.2.25 ～16.3.26
機能材料工学科	教 授	青 木 清	アメリカ鋳物、金属、材料学会第133回会議にて水素透過合金に関する講演、討論及び資料収集 (アメリカ合衆国)	16.3.14 ～16.3.19
化学システム工学科	教務職員	服 部 和 幸	第227回アメリカ化学会にて研究発表 (アメリカ合衆国)	16.3.27 ～16.4.2
機械システム工学科	助 教 授	鈴 木 聡 一 郎	文部科学省在外研究員 (甲種) としてシェーフィールド大学にて「歩容変化に適応可能なパッシブ制御大腿義足」に関する研究 (イギリス連合王国)	16.3.31 ～17.1.30

○海外研修

所 属	職 名	氏 名	渡 航 目 的 及 び 渡 航 先 国	期 間
機能材料工学科	助 手	石 川 和 宏	TMS Annual Meetingに参加及び情報収集 (アメリカ合衆国)	16.3.15 ～16.3.20

= 寄稿 =

樹氷のポリ－ニア

化学システム工学科 教授 小林 正義

1. オホーツクの序章

オホーツクの春は唐松の色調の変化からはじまる。冬のマイナス20度にも下がった気温は透明度の高い空気に一層緊張感を与え、唐松の枝えだの先端が鋭利なニードルのように天空を突く。水芭蕉が咲き始めるころ、その枝えだの鋭さは和らぎ、ピンク色のまだらが乳白色の光をかき混ぜるごとくそよ風にゆらぎだす。ついで淡い緑色の混入する序章の時を経て、突然エネルギーの爆発とともに緑の進化が始まり夏が来る。間髪を入れずに、小さな命たちの乱舞は見事なまでのカオスを描き出す。その多様なドラマは湖沼たちの心に映像として焼き付けられる。短い夏はこうして終わる。秋は命のカオスの総決算として様々な映像のフラクタルを固有の地域に特有のパターンとして残すがその寿命はダイナミックで一瞬たりとも同じかたちを止めない。まるでフラッシュ映像のように。

冬は荒々しく強引に足下に踏み込んでくる。その仕草はいつでも容赦はせず人々に弱音を吐かせるほどである。この時網走湖はいつの間にか凍結し、嘉多山を走る右手車窓から観る者に突然広大な無垢の白いキャンバスを突きつける。まるでこれから描かれるであろう色彩の乱舞を望むように。事実時間の経過とともにそのキャンバスには複雑な文様や記号が描かれ始める。最近、近くの農家で採れた野菜を販売する施設とともに設置された展望台から眺めると、時刻によって多様な三次元の色模様を感じることができる。特に3月早朝7時頃に網走市内から北見方向に嘉多山を走る時が最も良い。逆光の朝日が湖岸の雑木林樹氷に屈折されて車窓を射る。カーブを曲がるごとに見せる画面のパターンをパノラマのように変える。このころは厳寒中凍結された湖面には部分的に湖水が顔を出し多数のポリ－ニアが分布する。その寿命は短



いがそれまでのモノトーンな湖面に複雑な色彩と形状を加える。それは氷の温度によって黄土色、乳白色、青磁色、青緑色など言葉では表現できない色調になる。このように冬から春になる変わり目はこの地独特の風情を観る者に与える。このような空間に27年間生活した者は、それから大きな影響を受けたことは明らかである。「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。怯情を退ける勇気、安易を振り捨てる冒険心を意味する。ときに二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。年を重ねるだけでは人は老いない」サムエル・ウルマンのこの詩とこの地の自然がピアノとバイオリンの二重奏のように共鳴しあい心の中で強力な生きる力となって膨らんできたような気がする。誰もが故郷を二つ持つと言う。そんな意味でこの地は私にとって一つの故郷である。

2. 5%ルール

146人、これはこの地にきて私と卒業研究で接点を持った学生の数である。この数は多いのか少ないのか分からないが、様々な舞台で演じる役者のようにそれぞれが一筋縄ではゆかない個性を持ち、うっかりするととんでもない方向に飛んでゆく。時として誤った指導をするとせっかく持っていたその学生の能力を潰してしまう。100人いれば100様である。どうすればそ

れら潜在能力を引き出し現実のものとして伸ばしてゆくか。それは壮絶な26年間の戦いでもあった。1986年研究室の通信誌44Lettersを創刊した。その名前は北見が北緯44度に位置し、そこから世界に情報を発信することを目的にすることに起因している。学生が主体的になりニュース原稿を集めページをレイアウトする。その11月23日創刊号巻頭言でこんなことを述べた。「この研究室に接点を持った人々は一研究室の学生、卒業生だけにとどまるのではなく、もっとグローバルな国境を越えた心を理解し合える仲間であることを意味する。事実ベルギーのDr.Zelimer Gabelica、フランスのGr.J.M.Basset、ブルガリアのDr.Stoyan Stoyanovなど研究室を訪れ44Lettersのメンバーになりました。もう国の壁、会社の壁、大学の壁、学科の壁、研究室の壁は不要なのです。その自由な交流の中から新しい発見が生まれる。」

このあと1988年8月23日号では次のように書いている。「去る6月11日から7月10日まで1か月間アメリカ大陸に滞在し、第9回国際触媒会議(カナダカルガリー)及び第11回イベリロアメリカン国際触媒会議(メキシコグアナジュアート)に3人の大学院生武田、大橋、龍本及び菅野助手と共に出席した。この5人での旅は様々な思いがけない出来事や、困難に出会ったが大学にじっとしては学ぶことのできない貴重な収穫があった。それは個人によってそれぞれ異なるが共通して言えることは、彼らの英語を聞く能力が行く前に比べて格段に良くなっていることには驚かされた。特に武田君(現在日産ガードラーに勤務し海外研究員を数年経験)の進歩には目をみはるものがあった。大橋君がポスターセッションでイタリアのゼッキイナ研究室の研究者の質問になんとか対応しているのには感心させられた。龍本君はメキシコで体調を崩し苦労したが、行く前から勉強した甲斐があってスペイン語を一番良く理解し街の人々とのとけ込み方が自然であった。カルガリーではアメリカポストドクター時代の友人Mr.Robinの、エバンストンではMz.Antonuiq

及びMz.Stoughの世話で、それぞれ3軒のホストファミリーを紹介され数日間分散して宿泊した。彼らはこれらの経験を通して初対面の挨拶の仕方、握手の仕方、おつりの数え方、家族の中でのお手伝いの仕方など本で読んで学ぶのではなくて体で触って知ることができたと思う。来年はいよいよ交換留学生の実行の年である。院生の一年、二年生は日頃の語学力向上のための努力に期待したい。近年強く思うことは、この大学で仕事をしていて良かったということである。自分が同世代にできなかった事を、夢を彼らに託してその可能性を引き出し、伸ばすことができたとき自分の事のように嬉しい。若いと言うことは、可能性があることを示す。今この研究室は世界に向けた情報を発信し始めている。研究、人、文化、人間愛、など地球家族形成のために。」

この後数年にわたって大学院生がアメリカProfessor Weis (Worcester University)、Professor Dadyburjer (Westverginia University)、カナダProfessor Chakma (Calgary University)、オーストラリア(Monash University)のそれぞれの研究室で4か月から6か月修論研究を続けた。国際会議で知り合ったこれら友人達は、皆快く研究指導を引き受けてくれ若い異国の学生に異文化の体験をさせてくれた成果は、今彼らの仕事の中で確かに生かされている。

教育は無償の愛である。それには終わりのない情熱の投入が必要であると言われている。そんな信念で26年間走り続けてきた。こんな苦しいことが長続き出来たのには理由があった。いつも心の中で「教育の原点は5%ルールから始まる」と思ってきた。きれいごとではない日常生活の中で、誰しも投入した努力に成果を望むものである。それが当たり前であるが、教育の現場ではそれは通用しない。成果は5%と思うこと。この5%のために100%の努力をする。それが教育の現実であると信じている。かと言って自分がそれをいつでも実行できたかと言えば嘘である。5の成功に10の失敗である。しかし退職の時のいまこの5%ルールは正しか

ったと思っている。

3. 正樹君のこと

人は誰でも弱点を持っているものである。窮地に陥るとそのことを口に出したり弱音を吐いたりするのがあたりまえである。正樹君は1989年に私の研究室に入ってきた。見かけは普通の学生であるが、彼は重い病気をそのしっかりした身体の奥に沈着させていた。B型肝炎の治療のため年1度は入院していた。そのときはいつも突然やってきたが彼の顔には陰が見えなかった。「不均一系触媒反応の動特性シミュレーション」が研究テーマであったが、その意欲的研究姿勢は大きな成果を挙げ、論文としてアメリカのジャーナルに2件載るほどであった。化学工学学会にはよく二人で出席したが、宿泊は費用の節約のためいつも二人一部屋に泊まるが多かった。東大近くの宿舎での入浴は古い木造の廊下を通り暗い湯船に一緒に入ったものである。中学の英語教師をしている父親がアメリカ英語研修旅行に行く話をしてくれ、父を尊敬していることが良く分かった。このころ同級生が海外留学に出かけているのをどんな想いで観ていたか予想できなかったが、最後の入院の時その想いが彼の心の大きな部分を占めていたことを知らされることになる。

修士論文締め切りが近づいたころ彼は再度入院を強いられた。これは北大病院での、肝臓に出入りする血管のバイパス手術と言う大きな負担の後間もないことで、またいつもの出来事と思わせた。日赤病院のベッドの上で修論のまとめと発表の仕上げをすることにして、病室の壁に紙を貼り付けての議論を数日続けたが、その試練によく耐え弱音は吐かなかった。修士の修了証書もらった後退院して再び研究室に笑顔で訪れた。少し黒ずんで生気が弱っているような気がしたが、その目は希望に輝いていた。しばらく研究室で学生達のパソコン指導をしてくれることになり出入りしていたが、まもなく再入院、その後亡くなった。息を引き取った直後電話を受け、早朝に霊安室で悲しみの面会をした。静かな寝顔であった。亡くなる前日に「担

当医が学会から帰ってきたらアメリカに留学したいことを相談する」と付き添いの母親に言っていたという。病気がなければ同級生と同様自分も行けたはずの海外留学、どんなにか果たせぬ夢が広がっていたことか。決して口に出すことはなかった彼の心情。現代医学の遅い進歩、インターフェロンの使用が遅れたことなど自分の力ではどうにもならないこと、一度としてぐちや弱音を口に出すことはなかった。人間の人生は人それぞれに重い意味がある。20年でも80年分生きた人もいる。それは長さではなく別の何か固有の密度のようなものがあるのではなからうか。彼の心の中は計り知れないが、強い生きる力を与えられたような気がする。学生は決して教える相手ではなく教えられる相手でもあることは、常に感じてきたことであった。今この時期に改めて様々な個性の学生達を思い出し、彼らとの一瞬の時を共有できたことに感謝している。

4. 終章

今大学は大きな変曲点にさしかかっている。どのような舵をとるかによって、それぞれの大学の将来を決定づけることは確かである。国際社会は冷戦時代には無かった困難な問題に直面していることは誰もが承知している。個々人のアイデンティティーが問われているのである。大きな力の下で押しつぶされる微かな弱者達がそれでも自分達の存在を主張したいともがいている。多様性の存在がそのシステムを長らえるのに有効であることを、生物が20億年もかけて到達した成果である。大勢に無批判になびくことの危うさは人間の歴史が幾たびも教えているがその過ちは繰り返される。そんな中で自分のアイデンティティーをどのように守れば良いのだろうか。過去の人たちはそれぞれ固有の自己防衛機能を創造して生きてきたが、いま私たちにそれが問われていると思う。

皆様方の未来に幸あれと祈って筆を置く。ありがとうございました。

= 諸報 =

21世紀のエネルギーと環境に関する特別講演会を開催

(教務課)

2月20日(金)大学院学生を対象として、茅陽一(財)地球環境産業技術研究機構副理事長/研究所長による21世紀のエネルギーと環境に関する特別講演会を開催しました。

茅氏は、新たなエネルギー創生に関する分野では日本の第一人者であり、当日は「地球環境問題の展開とエネルギー技術」をテーマに、豊

富な経験に基づいた幅広い講演をいただきました。

大学院学生は論文発表の時期にもかかわらず多数聴講しました。

出席した学生からは、多くの質問が出され学生の地球環境問題への関心の高さがうかがわれた講演となりました。



講演する 茅 陽一氏

学長主催特別講演会の開催

(総務課)

去る2月27日(金)に電気通信大学長梶谷 誠氏をお招きして「法人化に対する電気通信大学の取組」と題して、学長主催の特別講演会が行われました。電気通信大学では、法人化に求められる目標として、「高度コミュニケーション科学」の創生・発展を目指しております。

また、COE、COL&知的財産本部の採択校として今後の取り組みなど約2時間にわたり講演いただきました。

学長を始め約40人の教職員は、熱心に聞き入っていました。

第2回外国人留学生見学旅行

(教務課)

1月31日(土)から2月1日(日)の一泊二日の日程で、外国人留学生見学旅行が実施されました。今回の見学旅行は、オホーツク海の自然と生活を体験するとともに留学生の交流を深めることを目的とし、家族やチューターを含めた50名が網走市を中心に各施設を見学しました。

今年は、昨年大好評を博した紋別の「ガリンコ号」に続き、初日「観光砕氷船おーろら号」に乗船しましたが、流氷の南下が遅れているため船上から見るできない残念な航海となりました。留学生からは、早くも来年の見学旅行に期待する声が聞かれました。



観光砕氷おーろら号をバックに

2日目は網走監獄博物館、オホーツク流氷館、北方民族博物館を見学し、オホーツク地方の歴史や文化を学びました。

また、この日は天都山から沖合10kmの水平線上に流氷を目視することができました。参加者一同あきらめていた流氷見物が遠望ながら叶ったことを喜びつつも、一夜にして変わるオホーツク海の風景に驚いていました。

帰路、網走氷上祭に立ち寄り、結氷した網走湖上でのスノーモービル乗車体験、冰雪像前での記念撮影など思い思いに冬を満喫し、無事見学旅行の幕を閉じました。



北国満喫ー！

外国人留学生スキー研修

(教務課)

3月1日(月)北見の寒さを吹き飛ばそうと外国人留学生スキー研修を実施しました。

この研修は当初1月15日に予定していましたが、記録的な暴風雪により順延していたもので、中国・韓国人留学生を中心に約30名が参加しました。

スキーをはくのも初めてという留学生が多く、4グループに分けられた参加者は4名の指導員から、それぞれ基礎レッスンを受けました。



ボーゲンで滑走

参加者は始め、このところの春めいた陽気で硬くなった雪面に苦戦していましたが、ボランティアの日本人学生の助けもあり、昼過ぎには全員がリフトに乗り、ゲレンデをゆっくりと滑走して降りて来るまでに上達しました。

留学生達は、すっかりスキーに魅せられたようで昼休み時間も早々に切り上げ、また自由滑走では集合時間ぎりぎりまでスキーを楽しんでいました。



2004年留学生交流の夕べを開催

(教務課)

3月4日(木)市内のホテルで、外国人留学生と北見市及び近郊の国際交流関係者、ホストファミリー及び本学教職員など約130名が参加して「2004年留学生交流の夕べ」を開催しました。

常本学長の挨拶に続いて、報告会では「思い出の一枚」と題して、卒業・修了する留学生の写真がスクリーンに映し出され、研究室での活動や、楽しかった夏のキャンプなどいろいろな思い出話が披露されました。

最後に、修了生代表による感謝の言葉があり、卒業・修了する留学生には学長から一人ひとり

に記念品が贈られました。

報告会終了後のパーティーでは、日頃からお世話になっているホストファミリーや支援団体の方々との懇談の中、中国人留学生の家族による伝統的な歌とダンスに続いて、韓国、バングラデシュ、マレーシア各国の留学生による母国の歌が披露されました。

また、日本人学生からは印象に残る留学生のエピソードが紹介されるなど、和やかな雰囲気の中閉会しました。



バングラデシュ留学生のコーラス

平成15年度奨学・奨励金及びミント賞授賞式

(学 生 課)

学部学生の学習奨励を目的に設けられた、本学奨学基金による奨学・奨励金及び学生後援会の支援によるミント賞授賞式が3月18日に第一会議室にて受賞学生・関係教職員約40名の出席

の下に実施され、奨学・奨励金受賞者6名、ミント賞受賞者29名がそれぞれ表彰されました。

授賞式では、常本学長から受賞者一人ひとりに賞状と副賞が渡され、祝辞が述べられました。

奨学・奨励金受賞学生

機械システム工学科	4年	山 本 恵 輔
電気電子工学科	4年	八 木 晃 次
情報システム工学科	4年	宮 本 美智子
化学システム工学科	4年	加 藤 智 規
機能材料工学科	4年	鯉 江 之 典
土木開発工学科	4年	米 田 英 治

ミント賞受賞学生

(学会賞分野)

機械システム工学専攻	1年	高 橋 康 徳
機械システム工学科	4年	山 本 恵 輔
機械システム工学専攻	1年	星 野 泰 孝
機械システム工学科	4年	今 村 祐 輔
機械システム工学専攻	1年	長谷川 勝 啓
電気電子工学専攻	1年	高 橋 伸 一
電気電子工学専攻	2年	國 枝 直 人
電気電子工学科	4年	江 口 太 悟
機能材料工学専攻	2年	上 城 政 博
機能材料工学科	4年	板 谷 成 浩
電気電子工学専攻	2年	山 本 幸 生
システム工学専攻	1年	田 口 健 治
物質工学専攻	1年	加 藤 利 菜
システム工学専攻	2年	白 川 龍 生
土木開発工学専攻	1年	岩 渕 直

(課外活動分野)

情報システム工学科	3年	大 橋 洋 平
北見工業大学弓道部		

(社会活動分野)

化学システム工学科	4年	佐 藤 元 希
土木開発工学科	4年	坂 井 勇 太
土木開発工学科	4年	南 琢 竜
土木開発工学科	4年	宇 田 樹 人
土木開発工学科	4年	青 木 敬 太 郎
機械システム工学科	2年	川 原 拓 海
機械システム工学科	1年	神 卓 也
機械システム工学科	1年	関 裕 士
電気電子工学科	1年	小 林 孝 義
化学システム工学科	1年	上 田 智 也
機械システム工学専攻	2年	諸 橋 一
機械システム工学科	1年	本 川 伸 正

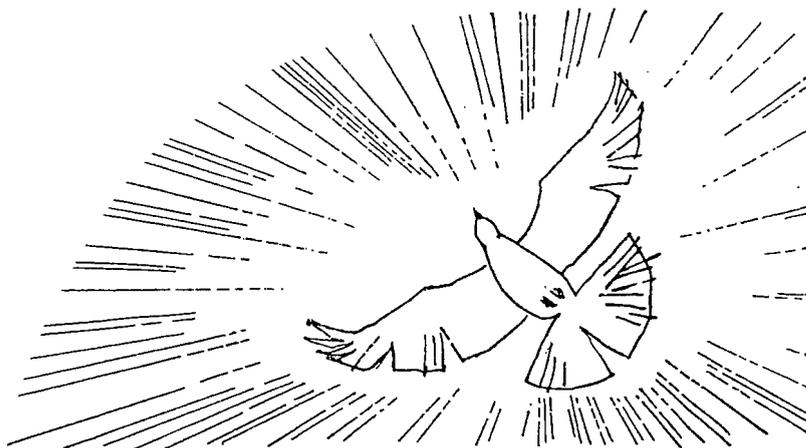


北見工業大学永年勤務者表彰式（退職時表彰）

（総務課）

平成15年度北見工業大学永年勤務者表彰式（退職時表彰）が、3月31日(水)午前10時から学長室において行われました。

退職時表彰の被表彰者、学生課専門員 三木田敏氏、総務課専門職員 長谷川充子氏、会計課管財係長 石谷洋子氏、会計課守衛長 上田積氏の4氏に対し、学長から表彰状の授与並びに記念品が贈呈されました。



= 日誌 =

(総務課)

(1月)

- 1月 5日 御用始め
 7日 総務委員会
 大学院専攻主任会議
 9日 産学官連携推進員・協力員合同会議
 13日 集中講義期間(～15日)
 大学入試センター試験監督員説明会
 14日 第669回教授会
 第140回研究科委員会
 17日 大学入試センター試験(～18日)
 19日 地域共同研究センター兼任教官会議
 20日 学生委員会
 21日 広報専門部会
 22日 第21回大学改革特別委員会
 地域共同研究センター特別講演会
 24日 大学入試センター試験再試験
 26日 教務委員会
 29日 サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラ
 ボラトリー美幌地域産学官連携福祉機器
 開発研究会
 31日 外国人留学生見学旅行(～2月1日)

(2月)

- 2月 5日 第22回大学改革特別委員会
 6日 SCS事業連絡協議会
 産学官連携推進委員会議
 9日 人事委員会
 大学院博士前期課程(第2次)入学試験(学
 力)
 大学院博士後期課程(第2次)入学試験(面
 接)
 10日 学生委員会
 大学院博士前期課程(第2次)入学試験(面
 接)
 12日 総務委員会
 13日 大学院専攻主任会議
 17日 入学試験実施委員会
 入学者選抜委員会
 18日 第670回教授会
 第141回研究科委員会
 後期定期試験(卒業研究審査含む)(～27
 日)
 私費外国人留学生選抜合格発表
 大学院博士前期課程・後期課程合格発表
 20日 特別講演会
 23日 第23回大学改革特別委員会

- 24日 人事委員会
 学生委員会
 25日 総務委員会
 教務委員会
 前期日程入学試験
 27日 大学院専攻主任会議
 特別講演会

(3月)

- 3月 1日 留学生スキー研修
 学年末休業日(～31日)
 3日 第24回大学改革特別委員会
 附属図書館委員会
 地域共同研究センター特別講演会
 4日 地域連携推進委員会
 留学生交流の夕べ
 5日 第671回教授会
 第142回研究科委員会
 入学者選抜委員会
 地域共同研究センター産学官連携推進委
 員会議
 6日 前期日程合格発表
 8日 第1回労使協議
 9日 人事委員会
 10日 総務委員会
 学術振興・国際交流基金運用委員会
 11日 教務委員会
 12日 後期日程入学試験
 15日 地域共同研究センター兼任教官会議
 16日 第25回大学改革特別委員会
 17日 地域懇話会
 18日 平成15年度奨学・奨励金及びミント賞授
 賞式
 情報システム運営委員会
 第2回労使協議
 19日 第672回教授会
 入学者選抜委員会
 20日 後期日程合格発表
 23日 教務委員会
 24日 附属図書館委員会
 25日 学位記授与式
 26日 第26回大学改革特別委員会
 29日 未利用エネルギー研究センター特別講演
 会
 31日 北見工業大学永年勤務者退職時表彰式
 平成16年度編入生ガイダンス

平成16年

春の全国交通安全運動

4月6日(火)～15日(木)

＝ストップ・ザ・交通事故死＝
～めざせワーストワン返上～

※この学報は再生紙を使用しています。